

『六度集經』と他經典とのかかわり

——康僧会の經典作成の思考方法——

伊 藤 千 賀 子

はじめに

『六度集經』（以下『六度』）とは、『大正新脩大藏經』の第 3 卷本緣部の最初におかれている經典で、8 卷、91 話のジャータカを六波羅蜜に分けた經典である。「【訳者・訳年代】呉の康僧会」¹⁾とあるが、梵語などの原典はなく、康僧会自身が著した偽經である²⁾。

本稿は、『六度』と類似の他經典を比較し、康僧会が 20 才までを過ごした交趾と中国との関係、康僧会も含めた植民地の人々の話していた言葉から、康僧会の主張と自分以外の者の訳を利用した理由を明らかにするものである。

1. 『六度集經』17 [維藍梵志本生]³⁾ と『四十二章經』⁴⁾

『四十二章經』とは、67 年に中インドからやってきた 2 人の僧侶が洛陽で訳した最初の漢訳經典とされてきたが、近年になって、晋代以降のものであることが明らかにされた⁵⁾。しかし、いまは両經を比較することによって『六度』の特徴をとらえることが目的で、成立の後先には目を向けない。

この經典は 42 章から構成されているが、それぞれの章は他の經典から引用されてできている。その一つに『六度』17 [維藍梵志本生] がある。物語の概要は、維藍というバラモンは転輪聖王で、無量の財産を所有していた。高価で贅沢なものを人々に布施することを好んでいた。しかし、經典は、維藍が一生をかけて凡人庶民を救済し続けたとしても、結果としての福德は大したことがないと述べ、さらに施飯供養の福德の差異について次のように言及する。後半のほぼ全文を比較の表としてあげる。“<”をはさんで、後の方が前の方より福德が大きい。

	『六度集經』	『四十二章經』
(1)		100 人の凡人に施飯 ＜ 1 善人に施飯
(2)	一生凡人庶人を救済し続ける ＜ 1 人の在家女性に一日施飯（功德は倍）	
(3)	維藍の布施 + 100 人の在家女性に施飯 ＜ 在家男性に 1 施飯	1000 人の善人 ＜ 1 人の五戒者に施飯
(4)	100 人の在家男性に施飯 ＜ 比丘尼に 1 施飯	
(5)	100 人の比丘尼に施飯 ＜ 高行の沙弥 1 人に施飯	
(6)	100 人の沙弥 ＜ 高德の沙門 1 人に施飯	
(7)	多数の具戒の人々への布施 ＜ 溝港 1 人に施飯	1 万人の五戒者に施飯 ＜ 須陀洹 1 人に施飯
(8)	100 人の溝港に施飯 ＜ 頻来 1 人に施飯	100 万人の須陀洹 ＜ 斯陀含 1 人に施飯
(9)	100 人の頻来 ＜ 不還 1 人に施飯	1000 万の斯陀含に施飯 ＜ 1 人の阿那含に施飯
(10)	100 人の不還 ＜ 応真	1 億人の阿那含に施飯 ＜ 1 阿羅漢に施飯
(11)	今までのすべての布施 ＜ 親孝行	
(12)	100 世の親孝行 ＜ 1 人の辟支仏に施飯	10 億阿羅漢 ＜ 1 辟支仏
(13)		100 億辟支仏 ＜ 三尊の教えで一世の二親を度す
(14)		1000 億の親を教える ＜ 1 仏に施飯
(15)		善人に施飯 ＜ 親孝行（二親は最高の神なり）
(16)	100 人の辟支仏に施飯 ＜ 1 人の仏に施飯	
(17)	100 人の仏に施飯 ＜ 1 寺院の建立 + 三宝へ帰依	

『四十二章經』の数字が引用文献より大きくなるのは他の章でも同じである。(1) から (10) までは紙数の都合でふれない。(11) から様子がちがってきて、中国の道德思想である親孝行がとりあげられる。『四十二章經』は最後に (15) 親孝行を置き、何より親に仕えることを重視しようとするあまり、最初に登場させた善人が再び登場するという流れとしても内容的にもかなり不自然である。ところ

(38) 『六度集經』と他經典とのかかわり (伊 藤)

が、『六度』は(11)でどんな布施より親孝行が大事と述べながら、(12)100世の親孝行より1人の辟支仏への施食、(16)100人の辟支仏より1人の仏、(17)100人の仏より1寺院の建立と三宝への帰依という。

2. 『六度集經』21 [兔王本生]⁶⁾と『旧雜譬喻經』45⁷⁾

『出三藏記集』は梁の僧祐が撰した現存する最古の仏教經典目録であるが、その中に『旧雜譬喻經』は見あたらない。『六度』は記されているので、同じ訳者とされる『旧雜譬喻經』が存在したのなら、記載されていたはずである。『隋彦琮録』(594年)以降の經録にはほぼ掲載されている。これは、本稿でとりあげる『旧雜譬喻經』第45話のウサギの本生譚が『六度』のものと単語も文章も酷似しているため、康僧会の訳とされるようになったと筆者は推定している。

両經は酷似しているが、『六度』には『旧雜譬喻經』にない文章がある。以下は全文であるが、下線部分のみが『六度』にのみみられるものである。

昔者梵志。年百二十。執貞不娶姪洸窃盡。靖處山澤不樂世榮。以茅草爲廬。蓬蒿爲席。泉水山果。趣以支命。(1)志弘行高。天下歎德。王娉爲相。志道不仕。處于山澤數十餘載。(2)仁逮衆生禽獸附侍。時有四獸。狐獼猴兔。斯四獸曰。供養道士靖心聽經。積年之久。山菓都盡。道士欲徙尋果所盛。四獸憂曰。(3)雖有一國榮華之士。猶濁水滿海。不如甘露之斗升也。道士去者不聞聖典。吾爲衰乎。各隨所宜求索飲食以供道士。(4)請留此山。庶聞大法。僉然曰可。獼猴索果。狐化爲人。得一囊麩。獼得大魚。各曰。可供一月之糧。兔深自惟。吾當以何供道士乎。曰。(5)夫生有死。身爲朽器。猶當棄捐。食凡夫萬不如道士一。即行取樵然之爲炭。向道士曰。吾身雖小可供一日之糧。言畢即自投火。火爲不然。道士觀之感其若斯。(6)諸佛歎德。天神慈育。道士遂留。(7)日說妙經。四獸稟誨。佛告諸沙門。梵志者錠光佛是也。兔者吾身是也。獼猴者秋鷲子是也。狐者阿難是也。獼者目連是也。(8)菩薩慈惠度無極行布施如是。

下線部分のみを取り出すと下のようになる。

- (1) 志は弘く、行ひは高し。天下徳を歎ず。
- (2) 仁は衆生に逮ぶ。
- (3) 「一國榮華の士有りと雖も、猶ほ濁水の海に満ち、甘露の一斗升に如かざるがごときなり。道士去らば晴天を聞かず。吾、為に衰ふるかな。
- (4) 請ふ此の山に留まらんことを。庶はくは大法を聞かんことを」と。僉、然りとして曰く、「可し」と。
- (5) 夫れ、生に死あれば、身は朽器たり。猶ほ、当に棄捐すべし。凡夫の万に食するも道士の一に如かず。

- (6) 諸仏徳を歎じ、天神慈育す。
- (7) 日に妙經を説き、四獸誨を稟く。
- (8) 菩薩の慈恵度無極なり。布施を行ずること是くの如し。

3. 『六度集經』 89 [鏡面王經]⁸⁾ と『義足經』 5 「鏡面王經」⁹⁾

『義足經』とは、最古の仏典のひとつとされるパーリ語の『スッタニパータ』の義品アッタカヴァッガに相当するが、内容や構成から別伝承のものとみられる。支謙訳。全2巻。ここでは過去物語のみをとりあげる。内容は、いわゆる「群盲象をなでる」という寓話である。『義足經』も最後の偈を除けば、全く仏教的要素は見あたらない。また、これも前項の兎本生とおなじく、両經の単語・内容ともに酷似しているのだが、『六度』は3ヶ所増補している。（本文は省略）

- (1) (鏡面王は) 仏の要經を諷して智恒沙の如し。臣民は多く誦せず、鎖小書を帶し、螢灼の明を信ぜり。日月の遠見を疑ひければ目瞽の人を以て喩へと為し、彼の行独を棄てて巨海に遊ばしめんと欲す。
 - (2) 鏡面王は大いに之を笑ふて言はく「瞽ならんや。瞽ならんや。爾は猶ほ仏の經を見ざるものなり」と。
 - (3) 又曰はく「夫れ小書を専らにして仏經の汪洋として無外に巍々たる無蓋の真正者を覩ず。其れ猶眼無きがごとからんか」と。是に於て尊卑は並に仏經を誦せり。
- (1) (2) (3) から分かることは、文章を書き換えることはほとんどなく、新たに仏教的要素を書き加えていることである。

4. 康僧会の生涯と呉

『高僧伝』によれば、「康僧会の祖先はトルコ系であるが、代々インドに住まいしていた。父の代に交趾（ベトナムのハノイ近郊）に移住して商売をしていた」¹⁰⁾という。康僧会は10代で両親を亡くして出家。建業（南京）にやってきたのが247年。また康僧会が亡くなったのは呉が滅亡して5ヵ月あまりたった280年9月という。生年が不明なので年齢も定かでなかったが、年令は筆者が『唐会要』の記述から特定し、昨年発表した¹¹⁾。康僧会の主たる活動の年月と年令は次のとおりである。生年は228年、247年20才で交趾を出て建業に到着、252年25才で『六度』作成（孫権死去）、280年53才で死去（呉国滅亡）。

さて、そのころの交趾は中国呉王朝の植民地であった。そこに勤務する中国の

(40)

『六度集經』と他經典とのかかわり（伊 藤）

官吏の多くはひたすら住民を搾取して私腹を肥やすことばかりを考えており、政治のやり方もひどく粗暴であったため、反乱が続出した。康僧会が建業にやってきた翌年の248年に、呉の圧制に対して起こったのが6ヵ月の熾烈な戦いが続いた「趙姬の反乱」である。康僧会が国を後にする頃の国内は非常な混乱をきたしていた。仏教がめざすものは人々を困難から救うことであるから、康僧会は仏弟子として、人々を救おうと思った。交趾に赴任した粗暴な官吏たちを改心させるためには、彼らを派遣した呉王に直接はたらきかけるしかないと考えた。ちょうど康国の男として外国へ出る時期でもあった。

3世紀半ばの中国は魏・呉・蜀の三国時代であった。康僧会が呉に到着した時は晩年とはいえ、まだ初代の王孫権が治めていた。ところで、康僧会が期待していた呉国の為政者たちは交趾の役人たちよりはるかに粗暴な人間であった。『三国志』には「孫権は容赦なく殺戮をおこない、晩年にいたってそれがいよいよつものった」¹²⁾とある。粗暴な権力者に、真なる王としての態度やあり方を教えて人民のための政治をさせなければならない。だからといって、康僧会自身の考えをそのまま述べれば、命が危うくなって、理想の国家に生まれ変わる前に康僧会自身が殺されてしまう。そこで、インドの經典にはこんなことが書いてあると言って、自分で作成した經典『六度』を見せたのである。

呉王たちが残虐であった理由のひとつには、民衆の絶大なる信頼と支持を得ている名士の存在があった¹³⁾。その名士たちを越えるためには、仏教を信仰することによって本物の智慧を王が得て、さらに民衆にも広めて、かれらも本物の智慧を身につければ、人々は孫呉をよく理解し支持するようになる。さすれば、交趾に着任している者たちも、住民たちの立場を考えて行動するようになるはずである。

5. 当時の交趾の言語状況

中国でも漢字は民を統治するようなごくごく一部の者しかつかえなかった。漢字が使用できるかできないかが上層の者とそれ以外を分けていた。それ故、漢字をつかえるものたちは、さらに自分たちを特別な者にするために字を難しくしようとするしていたほどである。これらの人々が植民地の人々に容易に文字を伝授するわけがない。まして中国から遣わされた人々の乱暴さから考えても、中国語教育が行われたとは考えにくく、住民は現地語を話していたはずである。寺の外はもちろんであるが、寺の中でも經典を読む時以外は、僧侶同士も現地の言葉で

話していたのではないか。康僧会是優秀ではあったが、完璧に中国語がつかえたわけではなく、本人もそれをよく知っていて、他の訳者の文章を借り、仏教教義が足りないと思われる部分は自分で書き足したため、その部分が難解な文章で読みづらいのであろう¹⁴⁾。したがって『六度』は「少なくとも異言語からの原典から訳されたのではない」¹⁵⁾というよりも、康僧会はベトナム語で考えて、それを中国語に訳した可能性が高いのではないか。

ベトナム語を日常語としていて中国語を学んでいる者の書いた中国語にはそれなりの傾向があったはずである。今後その辺の解明が必要であろう。また、康僧会はベトナムの出身であるため、ベトナムでは研究が進んでいると聞いている。その研究者の方々と意思の疎通ができれば、『六度』の研究は大きく発展できるのではないか。

-
- 1) 鎌田茂雄ほか編『大蔵經解説大事典』雄山閣出版, 1998, p.40. 2) 拙論「『六度集經』の成立について——康僧会の動機と目的——」『印度学仏教学研究』第61巻第2号, 2013年3月, pp.996-991. 3) 『大正蔵』no.152, vol.3, 12b5-19. 4) 『大正蔵』no.784, vol.17, 722c1-10. 5) 松本文三郎「四十二章經成立年代考」(『東方学報 京都』第14冊第1分, 1943年10月). 望月信亨「第七章 支那仏教の渡来と四十二章經」(『仏教經典成立史論』法蔵館, 1946, pp.360-424). 岡部和雄「四十二章經」の成立と展開——研究史のおぼえがき——」(『駒澤大學仏教学部研究紀要』第25号, 1967).
6) 『大正蔵』no.152, vol.3, 13c. 7) 『大正蔵』no.206, vol.4, 518a-b. 8) 『大正蔵』no.152, vol.3, 50c-51b. 9) 『大正蔵』no.198, vol.4, 170a-c. 10) 康僧会伝は『大正蔵』no.2059, vol.50, 325a-326b. 11) 注2に同じ. 12) 『正史 三国志』6(陳寿, 裴松之注, 小南一郎訳, ちくま学芸文庫, 1993, p.161). 「然性多嫌忌, 果於殺戮, 暨臻末年, 彌以滋甚。」(『三国志』卷47, 「吳主伝第2」陳寿撰, 裴松之注, 中華書局, p.1178). 13) 拙論「訳語としての「四姓」について」『印度学仏教学研究』第59巻第2号, 2011年3月, pp.61-67. 14) 『四十二章經』の文章をもってきたと述べているわけではない. 15) 松江崇「『六度集經』『佛說義足經』における人称代詞の複数形式」『中国語学』246, 1999, pp.12-13.

〈キーワード〉『六度集經』, 康僧会, 『四十二章經』, 『旧雜譬喻經』, 『義足經』, 吳, 孫權, ベトナム, 交趾

(大東文化大学非常勤講師)